

## 編集室への手紙



## [編集室への手紙]

東北ブロックスポーツ大会—ブロック内職員の親睦と健康増進を  
図るために

日本赤十字社東北ブロック血液センター

中川國利

血液事業は都道府県単位で行われてきたが、2012年度から全国7ブロックを単位とした広域事業運営体制に移行した。東北ブロックには東北6県さらには全国から集まった職員により、東北ブロック血液センターが新設された。事業運営を広域的に行うためには、ブロック内職員の親密な意思疎通が必要不可欠である。そこで健康増進を兼ねた親善スポーツ大会開催が発案され、東北のほぼ中央に位置する岩手県南部で毎年開催しているので紹介する。

## 1. 各大会におけるハイライト

## 1) 第1回スポーツ大会

2012年7月29日(土)ソフトボールで開催したが、急な計画のため参加者は岩手・ブロックの2センターのみの総勢39名であった。岩手県奥州市の野球場で大会宣言後に準備運動を行い、優勝チームは若さに勝るブロックセンターであった。

## 2) 第2回スポーツ大会

2013年9月28日(土)新たに宮城・青森センターも加わり、血液事業本部に異動した1名の総勢70名が集まり、岩手県金ケ崎町の野球場で試合を行った。4チームでの勝抜き戦、そして3・4位決定戦を行った。優勝は多数の野球経験者を有する宮城センターであった。また交流を深めるため、近場の温泉旅館で入浴休憩後に盛大な懇親会を開催した。さらに深夜未明におよぶ二次会で、親密なる人間関係を構築した。

## 3) 第3回スポーツ大会

2014年9月27日(土)秋田・山形・福島センターも新たに加わり、血液事業本部などからの5名を合わせた総勢89名が5チームに分かれて試合を行った。優勝は再起を期して練習に励んだプロ

ックセンターで、恒例となった宿泊を伴う懇親会で大いに交歓した。

## 4) 第4回スポーツ大会

2015年9月26日(土)7センターに血液事業本部などからの4名を合わせた総勢82名が集まり、7チームに分かれて試合を行った。優勝は若さと人数で勝るブロックセンターであった。

## 5) 第5回スポーツ大会

2016年9月24日(土)7センターに血液事業本部などからの5名の参加も加えた総勢89名が集まり、7チームに分かれて試合を行った。優勝は常勝ブロックセンターであった。なお恒例の懇親会では各県の名酒が持ち込まれ、深夜まで雀卓を囲む強者もいた。

## 6) 第6回スポーツ大会

事務局を担ってきた岩手センターの負担が大きいため、持ち回りで主管することになり、2017年9月2日(土)宮城センターにより開催された。開催に先立ち競技種目についてのアンケート調査を行い、卓球とグラウンドゴルフが選出された。そこで温泉旅館付属の体育館およびグラウンドゴルフ場で開催した。血液事業本部などからの9名の参加を加えた総勢83名が集まり、8チームに分かれて試合を行った。午前の卓球では元選手が活躍し、午後のグラウンドゴルフではゴルフマニアが意外と苦戦した。なお卓球は福島センターが、グラウンドゴルフは秋田センターが優勝し、総合優勝は福島センターであった。またアトラクションとしてバドミントンも行われた。

## 7) 第7回スポーツ大会

2018年9月1日(土)福島センター主幹の下に、岩手県奥州市でボウリング大会が開催された(図1)。血液事業本部などからの6名の参加を加え

た総勢96名が集まり、8チームに分かれて試合を行った。宮城センターがセミプロの女子職員らの活躍により優勝した（図2）。

#### 8) 第8回スポーツ大会

2019年9月7日(土) 山形センター主催で、再びソフトボールで競技が行われた。血液事業本部などからの9名の参加を加えた総勢95名が参加し、6チームに分かれて試合を行った（図3）。優勝は若さと技に勝るブロックセンターであった（図4）。

#### 9) 幻となった第9回スポーツ大会

2020年9月12日(土) 青森センター主管の下に開催されるはずであったが、新型コロナ禍により中止となった。

### 2. スポーツ大会開催の意義と波及効果

スポーツ大会には東北6県の地域センターや東

北ブロックセンターに加え、血液事業本部や他ブロックなどに異動した元職員の90名前後が毎年参加している。東北ブロックの総職員数は700名ほどであり、日常業務を遂行しながらも1割以上の職員が参加する東北ブロック最大の行事として定着した。なお傷害保険に加入すると共に、個人負担軽減のために東京都医業健康保険組合に保健事業補助対象として申請した。

競技種目は当初はだれもが馴染みがあり、男女共に参加可能なソフトボールが行われた。しかし血液センター職員数にそもそも差があり、献血や供給などの通常業務をこなした上での参加のため、独自にチームを結成できないセンターが存在した。そこで対応策としてメンバーを融通し、合同チームを結成して試合に臨んだ。また試合中の怪我を防止するため、試合開始前には準備運動を入念に行い、競技時間は1時間または5イニング



図1 ボウリング大会(第7回大会)



図2 懇親会集合写真(第7回大会)

まで、ランニングホームランはなくツーベースまで、選手交代は何回でも可能とし、頑張り過ぎずに親睦を深めることに心掛けた。これまでの所は怪我などのトラブルもなく、順調に運営されている。また第6回大会以降はソフトボール以外の競技を求める要望に応え、卓球・グラウンドゴルフ・ボウリングも行った。少人数でもチームを組めるためセンターごとの対抗戦を開催でき、また職員の隠れた才能を見出す機会にもなった。

スポーツ大会で共に興じ、懇親会や二次会で飲食しながら交歓し、さらには同室に宿泊することにより、職員同士の意思疎通や信頼関係はより深まった。また血液事業本部や他ブロックに移動した職員と歓談して全国の情報を共有し、広域的な人事交流にも繋がった。スポーツ大会で涵養された信頼関係は血液事業の運営にさまざまな利点をもたらし、東北ブロックの業績改善の原動力にもな

っている。

日本赤十字社の医療事業では従来から各病院にさまざまなスポーツ同好会が設立され、ブロックごとさらには全国大会も開催されている。また近衛忠輝前社長は社長在任時に「もっとクロス」を提唱し、赤十字職員同士や外部の人々との連携を推奨した。血液事業をさらに推進するためにも、血液センター職員同士の連携を深める必要がある。そこで今後は単に東北ブロックに留まらず、全国的規模でのスポーツ大会開催が望まれる。しかしながら深刻な新型コロナ禍での開催は困難であり、新型コロナウイルス感染の早期終息が強く望まれる。



図3 ソフトボール試合開始前挨拶(第8回大会)



図4 表彰時集合写真(第8回大会)

